

劉小萌著『清代北京旗人社会』

上田 裕之

一 本書の概要

本書（A5版、四十二・二十一・一〇七四頁、北京、中国社会科学出版社、二〇〇八年八月）は、中国社会科学学院近代史研究所研究員劉小萌氏による、文字通り清朝時代の北京に居住した旗人（八旗の構成員）の社会に関する研究書であり、中国の国家清史編纂委員会研究叢書の一冊として刊行された。著者の劉小萌氏は、満洲人の社会史を専門とし、これまでに『滿族從部落到國家的發展』（初版タイトルは『滿族的部落与国家』）、『滿族的社会与生活』など数多くの著作をものしている。本書の構成は次の通りである。

- 第二章 旗人社会的形成
- 第三章 旗房与旗地
- 第四章 旗人与民人
- 第五章 形形色色的旗人
- 第六章 旗人的世家
- 第七章 旗人的文化与習俗
- 第八章 晚清旗人社会
- 第九章 旗人社会的瓦解
- 第十章 文献研究
- 名詞索引／大事記／参考文献／後記

本書の内容を紹介する前に、清朝および八旗について、ごく簡単に整理しておきたい。

清朝は、女真人（*Jurchen*）首長ヌルハチによってマンチュリア（およそ現在の中国東北部に相当する）において樹立され

第一章 緒論

たマンジュ^{グルン}国を出発点とし、一六三六年には第二代君主ホントイジが皇帝位に即くとともに国号を大清^{グライグレン}国と改めた。その前年には、女真の名称を廢して滿洲^{マンジュ}に改称している。一六四四年には明朝滅亡後の中国内地に進出し、一八世紀中葉までにモンゴル・チベット・新疆をも版図に組み込む巨大帝国へと發展した。かかる清帝国の中核となったのが八旗である。八旗は当初、清朝に帰順した全構成員によって編成され、各旗には滿洲（もとの女真人）・蒙古（清朝に内属したモンゴル人からなる）・漢軍（清朝に投降した旧明朝軍の將兵からなる）の別があり、皇帝および複数の皇族が旗王として八旗を分有した。清朝の中国進出後、八旗は首都北京に駐留する「禁旅八旗」と帝国各地の主要都市に駐留する「駐防八旗」とに分かれた。八旗に属する旗人は、明朝の統治下にあった一般の漢人Ⅱ「民人」やその他の諸集団からは嚴格に区別され、結果的に、「旗人Ⅱ」（原則として）清朝の中国進出以前に清朝に帰順した人々の末裔」となった。

それでは、以上を踏まえて、本書の各章の内容を概観していくこととする。

第一章では、まず研究の範囲として北京内城の主体居民であった旗人が設定される。ついで、孟森氏以来の研究史（日本・欧米を含む）を振り返った上で、本書の独自の視点が説明されている。すなわち、①絶対的多数を占める「中下層」の旗人たちの社会生活に注目する。②民族学・

社会学の理論と方法をも利用し、フィールドワークによって文献研究を補完する。③滿漢文の檔案、碑文、契約文書、族譜・家譜、図籍・画集など種々の史料を活用する。④旗人内部の経済関係、旗地の類型と区別、旗民（旗人と民人）の地域関係、旗民の経済関係、旗民の文化関係、旗俗の変遷と「漢化」、清末における旗人の貧困化と八旗制度の改革、辛亥革命と旗人社会の瓦解などの研究課題の検討を通して、清代北京旗人社会の変化のアウトラインを描く、とされている。

第二章は、表題に「旗人社会の形成」とあるが、実質的には形成期に関する論述というよりも旗人社会についての概説となっており、辮髮、滿洲服、主要ポストの任用状況、王爵・世職、俸餉、旗地、北京における旗人・民人の分居、刑罰や官途における旗人優遇、禁旅八旗と駐防八旗、八旗の基礎単位であるニルの分類とその長官たる佐領の役割、上三旗と下五旗、擡旗、旗王、内務府など、八旗の基本事項にくまなく説明がなされている。

第三章は、旗房（旗人の家屋）・旗地（旗人の土地）・旗人の墓地と祭田・旗人の施舍地、つまりは旗人の不動産に関する専論である。本章の第一節・第二節では、本来「国有」であった旗房・旗地が半世紀足らずのうちに事実上「私有」へと変質し、旗人間のみならず法的には旗房・旗地の取得を認められていなかった民人との間でも盛んに取引されるようになったこと、頻繁な交易を通して旗房・旗

地の多くが民人の手に渡ったほか、八旗内部でも一部の富裕な旗人のもとに集中し、八旗の物質的基礎が瓦解していったことなどが述べられる。以上の論述は、主に中国近代史研究所図書館に所蔵される多数の契約文書の分析に基づいており、本書のなかでも特に新規性・独創性に富んだ部分である。

第四章では、「分治」「分居」の措置がなされていた旗人と民人との間で、実際の生活上の必要により盛んに交流が進んでいたことが述べられる。すなわち、旗人間の旗房交易によって当初定められた旗ごとの居住地域設定が有名無実化し、さらには内城の旗房を入手する民人や外城に転居する旗人が増加し、本来の「旗民分居」は崩れて「旗民雑居」の状況が立ち現れたという。また、餉米（兵丁の給与）兵餉は餉銀と餉米によって構成される）の輸送や精米を行う碓房や、各種の商人、手工業者、水夫、僧侶、道士などの存在を通して、北京における旗人と民人との相互依存の具体像が描出されている。

第五章では、マンチュリア奥地の諸族に旗制を施行した「新滿洲」、ボーイ（奴僕身分）の漢人が「開戸」して正身旗人となったものの、民人が旗人の養子や妻となったものの、康熙の対ロシア戦争において捕虜となったロシア人からなる「俄羅斯佐領」、乾隆年間に一部の漢軍旗人を旗籍から外して民人にしたもの（「出旗為民」）など、様々な形態の旗人について論じられている。本書全体の論旨からみて、

本章のなかで最も注目すべきは、ボーイ身分の漢人や一般の民人の滿洲化、および漢軍旗人の出旗為民に関する記述であろう。そこには、そもそも「誰が旗人（滿洲）であり、誰が民人（漢人）であったのか」という次元においてさえ、事態は極めて流動的であったことが明示されている。

第六章は、旗人のなかの権門に関する考察である。まず内務府属のボーイの一族が地位を上昇させた「内務府世家」をいくつかのグループに分類し、そのような内務府世家の婚姻の傾向にも言及している。ついで、八旗滿洲と八旗漢軍の権門を祖上に上げ、滿洲の富察氏・鈕祜祿氏・馬佳氏や漢軍の李成梁一族・祖大寿一族などの来歴・著名人の事蹟・婚姻関係などが具体的に記されている。

第七章では、旗人の教育、騎射、服装、飲食、礼儀、婚葬、言語と姓名、信仰、娯楽といった文化・風習の面に光が当てられる。本章を通してしばしば言及されるのが、滿洲人の「漢化」である。例えば教育の項では、滿洲人が漢文化に対して引け目を感じるとともに「仰慕」の念をいだき、上層旗人は漢文士との交流を強く望んでいたことが述べられる。また、言語と姓名の項では、名のみを称して姓を挙げない「称名不举姓」の伝統が失われ、名前の一字や本来の姓に由来する漢字一字を姓のように使用する風習が広がっていったことや、上層旗人のあいだで字・別号の使用が普及していったことなどが記されている。

第八章では、清末における八旗の経済的窮乏化・軍事的

弱体化と清朝による対応について論じられる。まず、窮乏化の原因として、人口増加による兵丁採用機会の稀少化、咸豊以降の財政危機による兵餉の減額、金融業者や八旗の上官による搾取、清朝中央の八旗の首都駐留に対する拘泥などを挙げる。ついで、長年の平穩により八旗兵が墮落し、清朝中央も八旗軍の装備の近代化を怠ったことなどにより、軍として全く戦闘能力を喪失していたことが示される。そして、清末に至って清朝は「旗民分治」の解消を模索し、旗人の自活を推進する様々な対策を講じたが、当の旗人が生活の補助を求めるばかりで種々の改革による既得権利の喪失に抵抗したため、結局、旗人自活の試みは水泡に帰した、とされる。

第九章では、清朝滅亡から八旗消滅までの経緯を追う。まず、西太后の死から宣統帝退位までの経緯が一通り説明され、ついで民国政府の優待条例によりしばし存続した八旗について述べられる。

第十章は、各種史料の解題であり、官撰書と檔案・地方史志・筆記文集・外国人の記録・満文文献・輿図絵画・新聞雑誌・口述記録・目録索引・契約文書・碑文・家譜族譜・詞曲と、記載内容は非常に多岐にわたっている。

本編の後には、名詞索引、一五八三年のヌルハチの挙兵から一九二八年の八旗の完全消滅に至るまでの重要事項をまとめた年表、参考文献一覧、あとがきが収録されている。

二 本書の意義

さて、上述のごとく本書の概要を紹介した上で、本書の学術的価値あるいは行論上の手続きや論理構成に関する疑問などを挙げていくのが書評の常道であるが、社会史に不案内な評者が本書の意義を客観的・中立的・多角的に判定するのは困難である。したがって以下では、現在の日本における清朝研究の現状に対して本書がどのようなインパクトを与え得るかという点を中心に本書を語ることをお許しいただきたい。

日本において清朝というと、一般には、「最後の中華帝国」、つまり「秦・漢に始まる中国の歴代専制王朝の最後尾に位置する王朝」というイメージが強い。それに対して学術の世界では伝統的に、清朝が満洲人の打ち立てた王朝であることを重視する研究潮流が存在する。最近では、杉山清彦氏がかかる立場から精力的に執筆活動を行っている^①が、満洲史・内陸アジア史を専門としない研究者によって著された通史においても清朝が満洲王朝であることを強調する記述が当然の如くみられるようになりつつある^②。

ただし、そのような満洲的要素を重視する清朝研究の多くは、清朝皇帝がいかなる態度によって相互に異質な諸集団・地域を束ね上げていたのかを解明しようとするものであり、いきおい議論は観念や制度に関するものが主体とな

っている。しかし、清朝の満洲王朝としての側面を突き詰めようとするならば、満洲およびなかば満洲化したモンゴル人・漢人からなる八旗のあらゆる問題を検討していく必要があるろう。そうすると必然的に主要な研究課題のひとつとなるのが、為政者目線の歴史では十分に捉えきれない「中下層」旗人のありようであり、彼らの社会生活に密接に関わっていた民人（漢人）の存在である。近年の清朝研究では従来の漢地・漢人を中心とする見方の相対化がとかく強調されるが、満洲人の大半が漢地に移り住んだこと、そして、そのなかで満洲人が漢人世界の荒々しい社会経済にさらされ、中国内地進出以前との比較において「漢化」が進んだということとは、紛れもない事実である。清朝の満洲王朝としての側面を重視するのであれば——そうであるならばむしろ——、あらためて「漢地の征服者」「漢地への移入者」という点に真正面から光を当て直すべきであろう。旗人（満洲）と民人（漢人）との関係を詳細に検討し、「漢化」の問題を率直に論じた本書からは、かかる意義を見出すことができる。

如上の意味において特に評者の関心を引いたのは、「中下層」旗人の「漢化」過程の多面性である。旗人の漢化という点、清朝の「旗民分治」や満洲的伝統保持の努力にも関わらず現実の社会生活のなかで否応なく進んでいった、という理解が一般的であるように思う。しかし、「漢化」の過程はそう単純なものではなかったことが、本書からは

窺い知れる。例えば、内城・外城における旗民分居と内城における旗・ニルごとの集住政策は、「旗民分治」・満洲的伝統保持の要となる措置であるが、旗人が外城の民房を購入することは当初から認められていたし、一六八一年には退休したり病氣療養中にある満洲旗人・蒙古旗人およびすべての漢軍旗人の外城への転居を許可している（二五五、二五七頁）。さらに、極めて活発な旗房交易によって北京内城の旗・ニルごとの居住地域設定が早くも雍正年間には有名無実となっていたが、それに対して清朝は一七二三年に旗房売買に関する納税規定を定め、旗人間における旗房の売買を公認している。しかも、旗房の売買は単に内城のなかで旗人の居住場所が入れ替わるというものではなく、多くの「中下層」旗人の旗房喪失と裏表の関係にあったが、それに対して清朝は旧来的な居住体制への回帰ではなく京城内外における旗房の新規建設によって対応した（一〇二—一〇四頁）。明らかに清朝は、「旗民分居」や内城における旗・ニルごとの居住地域の維持にさほど執着しておらず、実際の社会経済の動向に柔軟に対応することを優先させていた。

また、為政者サイドによって満洲的伝統が明確に否定されたものとして、火葬の禁止がある。もともと満洲人は、死者を土葬する漢人とは異なり、火葬の風習をもっていた。しかし、清朝の中国進出後、死亡した駐防旗人の遺体を北京に移送し火葬する「帰旗」の実施が困難であったため、

現地では火葬してから遺灰を北京に送る措置が広まった。そして乾隆年間に至ると、「古に依り以て礼を尽くす」との名目のもと漢人式の土葬が命じられ、違反者は律によって罰せられることとなった（六四九〜六五四頁）。つまり、満洲的な火葬は本来あるべき姿から外れた「礼を尽くしていない」やり方であったと否定されたのである。

その一方で、確かに清朝は「国語騎射」をはじめとして満洲的伝統の保持を訴えている。しかし、本書を通してそのような対策の事例をみると、尚武の氣風を喚起するため狩りを挙行したり（六三二頁）、服装の漢化を戒める諭旨を下したり（六三八頁）、特定の旗人に対して個別的に漢風な名を改めさせたりしている（六七三、六七八〜六七九頁）が、どれも場当たり的な単発的措施に過ぎない。威勢だけはよい掛け声の向こう側には、押しとどめがたい漢化の波に対する清朝の淡泊な態度が透けて見えるのである。

このように、「漢化」問題に関する本書の記載からは、為政者の強固な意思に反して実態において「漢化」が進んだ、といった単純な図式には収まり切らない複雑さが看取できる。清朝は、「漢化」や容易に「漢化」につながる現象がある面では逡巡なく容認し、ある面では促進さえしており、一方で抑制に努めることもあったが、それとてどこまで本気であったかは定かでない。結局、帝国統治において「旗民分治」や満洲的伝統の保持だけが政策課題だったわけではないし、また、それさえ完璧に達成したならば帝

国統治が盤石になるというものでもなかったのである。プラグマティックな統治を何より重視する清朝において、「旗民分治」や満洲的伝統の保持は、その他もろもろの社会情勢を勘案しながら選択的に追究されるもの（そして時には選択的に放棄されるもの）であったと考えられる。本書は——おそらく著者の意図には必ずしも沿っていないだろうが——「清朝は満洲か中華か」といった議論それ自体を根本から相対化するための視座を与えてくれるのであり、それこそ、清朝の満洲的側面を再考するために必要な視座であると評者は考える。

三 本書の若干の疑問点と新たな研究課題

本書は、これまであまり扱われてこなかった「中下層」旗人に関する総合的な研究書であり、著者の旺盛な研究活動を反映して極めて長大な著作に仕上がっている。ただ、惜しむらくは、充実した内容はそのままにもう少しコンパクトにまとめることができたであろうことである。例えば、第三章第一節の旗房交易に関する著述と、第四章第一節の内城の居住区画に関する著述とは、論述内容に少なからず重複がみられるし、前者において提示される表三一と後者において提示される表四一二は、ともに旗房の契約文書を整理したものであり、ひとつの表に統合することができたはずである。また、第五章第四節の俄羅斯佐領に関する

記載では、辮髪や満洲服の説明がなされているが、既に第二章で詳しく論じた内容であり、概説は繰り返さずに俄羅斯旗人との関係に絞って論述するべきであろう。さらに、第七章第三節六八〇頁に挙げられた、乾隆帝の第一皇子（成親王永璽）の別号をめぐるエピソードに至っては、同じ章の第一節六二三頁にはば同じ形で掲載されている。

むしろ、ひとつの事柄について複数の観点から言及しなければならぬケースは多々あるが、最も密接に関係するテーマのところで集中的に議論を展開し、その他では当該箇所の参照にとどめるべきである。むしろ、内部参照を活用することによって、読者の理解もより多角的・立体的なものになることが期待できる。また、本書の場合は、一千頁を超える巨編であることが、専門分野を異にする読者にとって「とっつきにくさ」になってしまいかねないために、重複の回避には特に慎重になっていた良かったと思う。

最後に、本書においてたびたび論及される八旗生計問題について、ひとつの視点を提起してみたい。本書では、旗人の生活の都市化と奢侈化、八旗制が孕む矛盾の蓄積などにともなって旗人の窮乏化が進んだ、という説明が散見される。それは、大筋としては既に定着した通説的な理解でもあるのだが、かかる単線的・一方向的な説明は経済史的議論としていささか平板な印象を免れない。多くの歴史事象は錯綜する複数のファクターの均衡点上に位置している

はずであり、八旗生計問題についても、旗人の経済生活を追い詰めていった諸要因の側からだけでなく、旗人の窮乏化を「その程度でとどまらせた」側面からも考察しなければならぬだろう。また、一口に窮乏化していったといっても、時代によって、分野によって、窮乏化の程度はさまざまであっただろう。さらには、八旗生計問題においても旗人は、当時の上奏や諭旨においても現在の研究においても、時代の流れに翻弄されるばかりの極めて受動的な存在のように描かれるが、彼らなりの「生存戦略」はなかったのかという点も、気になるところである。

それらの課題に対して、旗人の困窮の原因を説明しようとする史料（例えば八旗生計問題を直接に論じる上奏や諭旨など）の言説に依拠して考察する限りは、従来の説明を超える回答は導出できないだろう。必要なのは、極力中立的なデータを集積することである。例えば、人口増加によって兵丁に採用され兵餉を受給する機会が稀少化したというが、具体的にどれほど稀少化したのか、そしてそれに戸の構成や、兵餉の購買力を決定する物価動向を勘案すると、旗人の平均的な収入と生存ラインとの関係はいかに推移していたのか——といった点を明らかにすることにより、旗人の窮乏化をよりの確に把握することが可能になるだろう。これは、十分すぎるほど重厚な本書の「不足」を言い立てるものではない。むしろ、本書のごとき「中下層」旗人に関する本格的な研究書が出現したからこそ、研究上の次

なる展開が見えつつあることを申し上げておきたいのである。生計問題の一点に限らず、八旗研究全般に関して、さらには清という王朝をよりの確に理解する上で、本書は看過することのできない重要な研究成果である。評者の非力により本書の魅力を余すところなく伝えられなかったばかりか、極めて恣意的な読み方を展開してしまっただが、本書が一人でも多くの読み手によって吟味、検討されていくことを祈念するものである。

註

- (1) Sugiyama Kiyohiko (杉山清彦) "The Ch'ing Empire as a Manchu Khanate: The Structure of Rule under the Eight Banners" *ACTA ASIATICA* Vol. 88, January 2005, Tokyo, pp. 21-48.; 「大清帝国支配構造試論：八旗制からみた」『近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク』平成一六〜一八年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者桃木至朗、二〇〇七年三月、一〇四〜一二三頁、など。また、同氏による研究動向の総括として、「大清帝国史のための覚書―セミナー「清朝社会と八旗制」をめぐって―」『満族史研究通信』第一〇号、二〇〇一年四月、一一〇〜一二六頁.; 「大清帝国史研究の現在―日本における概況と展望―」『東洋文化研究』第一〇号、二〇〇八年三月、三四七〜三七二頁、がある。
- (2) 例えば、上田信『中国の歴史⑨海と帝国』講談社、二〇〇五年。
- (3) なお、欧米においても、清朝が満洲人の建てた王朝であったことを重視する研究潮流は存在する。その代表的論者の一人であるマーク・エリオット氏の議論は、満漢関係を軸とする点で近年の日本の研究動向と傾向を異にし、また、満漢の交流・融合よりも緊張・齟齬を強調する点において本書とも相違する。Elliot, Mark C. *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China*, Stanford University Press, 2001, Stanford.
- (4) 岸本美緒「清朝とユーラシア」『講座世界史②近代世界への道』東京大学出版会、一九九五年、一一〜四二頁.; 同「一八世紀の中国と世界」『七限史学』第二号、二〇〇一年三月、一一〜一五頁。
- (5) 清末において俸餉を受給していた旗人は全体の約一割に過ぎなかったと推計される。Rhoads, Edward J. M. *Manchus and Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China, 1861-1928*, University of Washington Press, 2000, Seattle.